

環境審議会環境企画部会（平成 25 年 3 月 21 日）における 各委員の主な意見

滋賀県環境総合計画の改定に関する議題の中での「環境学習」に関するコメント

- ・ 「次世代、未来世代に負の遺産を継承しない。」というような持続可能性を検討すべき。
- ・ 「低炭素社会の実現」と「琵琶湖環境の再生」が今の計画の二大目標として掲げられている。滋賀県が琵琶湖環境というキーワードを外すわけにはいかないだろうというのは、これはよく理解しているのですが、滋賀県の人たちの暮らしている生活環境をどう改善していくかという施策も盛り込まれていますから、何となくこの2つの目標だけでいいのだろうか。
- ・ 「環境を守るという県民一人ひとりの自覚と取組」や「地域の住民の環境保全に対する共通理解と相互協力」の割合が高いが（県政世論調査）その先、自分たちがどうしていいのかわからないというのが課題だと思う。このギャップをどうやって縮めていくのかが次の議論になるのではないか。
- ・ 環境教育で大切なことは、「これがいいんだ」という答えを教えるのではなくて、まず関心を持ってもらい正しい知識を持ってもらうこと。時代の流れやその地域の環境や経済なども踏まえて、「滋賀県では」、「この地域では、という選択ができるような環境教育を目指す必要がある。
- ・ 環境教育においては、「自然とはこういうものだ」などといったことだけでなく、もっと基本的な環境哲学的な「人はどうやって生きるべきか」や「余分な電気を使わないことは良い。」といった広い意味での環境教育が重要。

滋賀県における今後の環境学習のあり方検討まとめのイメージに対するコメント

（1）基本的な考え方について

- ・ 持続可能社会や生物多様性の主流の考え方をベースにどのようにプログラムを開発していったらいいのかという議論ではなく、抽象的な方法論が出ており、何を教えるかという議論がないのが直観的に違和感を感じた。
- ・ （公害問題や生物多様性保全などの歴史を踏まえた上で）最低限これだけは知ってもらわないと困るということは、各方面からの環境学習の基本的な考え方として、具体的な案をきちんと入れるべきではないか。

（菊池委員のコメント）

会が何を目的に召集されているのか、という根本的な問題にかかわると思うが、現状は、小学校、公民館、地球温暖化、生物多様性など、参加している委員の背景や専門性も異なっており、それぞれの現場からの具体的な指針や内容案などの議論は行われていない。

一般論としての重要性、環境教育とはこうあるべきだという意義という話はされているが、「では、それをどうやったら具体的に実現ができるのか」、「どういった知見が足りないのか」、「それを構築していくために、どういった具体的な支援、あるいは組織が必要なのか」といったところの議論をすべき、と受け止める。

(2) 指導者の役割について

- ・ アンケート（滋賀の環境学習データ集 2012）を見て、自然体験型の活動は結構あるが、例えば琵琶湖や森に行ったら何かフィールドワークをしたら、それで自然が理解できるというものではない。自然に対するアプローチの仕方をきちんとしないと、学習者が誤ったメッセージを受け止めてしまう可能性があり、どこかの場所に出かけていったらいいというものではない。
- ・ 「環境というのはこういう物の見方ができる。こういう物の切り口で、環境ということは見ることができる」ということを伝えるということが非常に重要。そういう意味では、きちんと環境学習を進めていくことができるような専門家向けのプログラムというのをきちんと開発するということが非常に重要ではないか。

（菊池委員のコメント）

指導者育成という観点の中で、既に知見を持っている方たちをどのように使っていくのかということが非常に重要。

湖や森に行ったらそれが環境教育ということでは、それは違うのではないかとということが指摘される一方で、そういった体験というものがベースにないと、なかなか環境が大事だ、あるいは環境を学ばなければいけないという意識が育ってこない。そういったことをきちんと両輪として支援していけるような仕組みをつくっていければいいのかなと思う。

- ・ 人材育成に係るリーダー向けのイベントや研修が少ない。大学院で近江環人をやっている人や地球温暖化防止活動推進員といった方は多くいるが、その人たちがつなげる仕組みがないから、結果的に人材育成がどうこうという話になっているのではないか。そういうイベントの場を今後設けて、リーダーの共通意識を培っていける場というのが必要なのではないか。

(3) 地域の人材の活用について

- ・ 「若い人が参加しない」と会合でよく話を聞く。自分が教えて、思ったことは、若い人は学ぶ意欲はあるかもしれないが、基本的な知識はない。だから、年配の方を活用するというのは大変重要で、地域で活躍しているお年寄りや、企業で活躍してリタイアして専門的な知識を持っている人をどう活用するか。そういう人たちをその地域でいかに活用するかを考えないと、これからの日本というのは成り立っていかないと思う。
- ・ 学生が若い人が、学ぶ意欲はあるが出ていかないというのは、どうしてよいのかわからないといったことや、受け皿がないということが問題なのではないか。なかなか踏み出せないということがあるので、そういう受け皿をつくってほしい。
- ・ 「地域に着目する」ということについて、歴史はすごく大切だと思う。例えば段階的に、小学生なら自分の身の回り地域のゴミ拾いをして、どういう現状だったか、どういうふうにもっとよくしていきたいのかを自分で考える場づくりが必要。地域に出ていく仕組み、そこで愛着を持っていくような仕組み、そして自分で考えることによって、例えばもっと自分の住んでいる地域の環境の歴史について知りたいといった、人づくりが必要。

- ・ NPOの数は結構多く、そういうところで活動している人は、まさに地域のリーダー、サポーター的要素も備えておられると思う。リタイアした人、あるいは子育てを終わって時間とお金に余裕のあるような人に、例えばNPOを通して、次のリーダーになってもらうための研修や実習を受けてもらう。その人がNPOで、さらに活躍し、自分が新しいNPOをつくらうとするといったうまく回るようにすること。

- ・ 人との付き合い、つながりの中でやっていてよかった、人のためだけではなくて、後で振り返って、自分にもよかったというふうないい状況になるように。その際に、研修を受けたから、地域のリーダーとして個人で何かやってくださいというのは無理だと思う。NPOの中には、経験を積んだ人もいるし、そういう人たちの交流の中でやれば、何かうまくいく面もあるのではないかと思う。

(4) 世代間のつながり

- ・ 「人と人のつながり」のところで、世代間のつながりというのが出てくる。例えば、石けん運動のような活動が滋賀県で行われて大きな成果を上げたが、そのNPOが解散してしまうと、それが次に引き継がれないというようなことも考えられる。その意味で、時間軸方向での「つながり」が環境学習の中に位置付けられるように、もう少し表に出るようなかたちで表現する方がよいのではないか。

滋賀県における今後の環境学習のあり方について 検討まとめのイメージ

はじめに

目指す社会のイメージ

琵琶湖をはじめとする滋賀の環境と生態系が健全に保たれ、バランスのとれた経済発展を通じて、県民すべての生活の質の向上が図られている豊かで安全な社会。
(持続可能な滋賀社会ビジョンをベースに)



琵琶湖環境の再生

琵琶湖流域および周辺で健全な生態系と安全・安心な水環境を確保し、遊・食・住等の人の暮らしと琵琶湖の関わりを再生すること

低炭素社会の実現

地球温暖化などの環境変化への対応として、環境保全と経済発展を両立しながら、温室効果ガスを削減すること

目標



(小委員会での検討の方向)

主体的に環境保全行動を行う人育ち・人育てによる
持続可能な社会づくり

環境学習のあり方 検討の意義

環境教育等促進法の施行、県内外の社会状況の変化を踏まえて、持続可能な社会づくりのための環境学習（ESD）という観点から、滋賀県における今後の環境学習のあり方について検討する必要がある。

環境学習のめざすもの

<目標>

主体的に環境保全行動を行う人育ち・人育てによる
持続可能な社会づくり



<目標達成に向けて特に重要な視点>

直接「体験・実践」する。

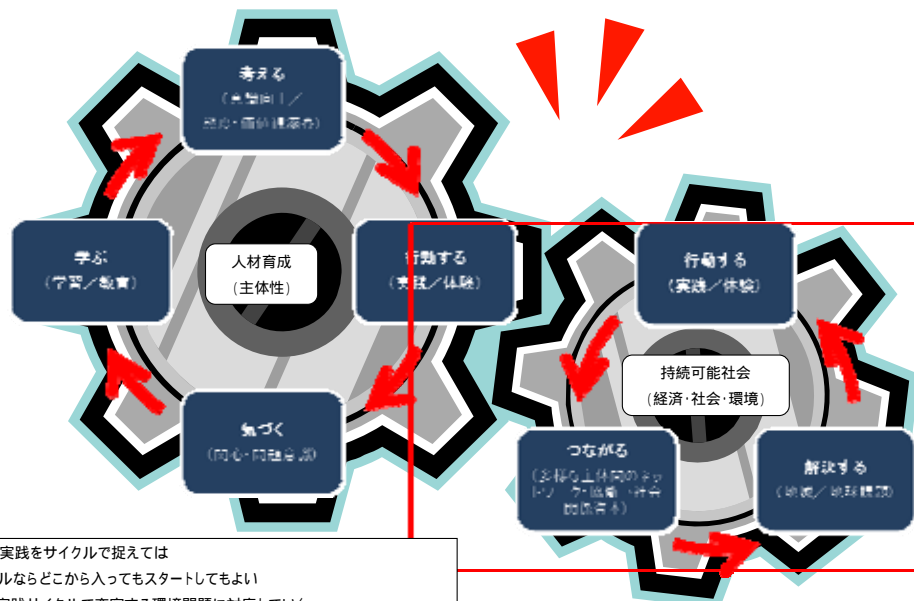
- ・環境の恵みを、体験を通して、全身で感じ、環境を大切に思う心を幼少期から育むことが重要である。また、地域の身近な課題に対する取り組みを体験することによって、学びに実感を伴わせることができ、地域への関心・愛着に裏打ちされた行動につなげることができる。
- ・本県には、琵琶湖をはじめ、多様な自然体験の場があり、かつ、びわ湖の日に環境美化活動を実践するなどの滋賀らしさがある。

琵琶湖を守ろうと立ち上がった県民運動の原点に立ち返り、持続可能な社会づくりのために解決すべき環境課題（特に、琵琶湖環境の再生、低炭素社会の実現）を自分ごととして捉え、普段の消費行動など身近なことから行動する人材が育つ、あるいは人材を育てることにより、持続可能な社会を実現すること

「つながり」を意識し、深める

- ・私たちが自然の生態系の中で生きていることを理解し、人と人との絆や、人と自然、人と社会とのつながりを深めていく必要がある。
- ・自然体験や環境保全活動の実践を通して、様々なつながりを理解し、深めることで、そのつながりが学びに、持続可能な社会づくりへとつながっていく。

持続可能な
社会づくりのための
環境学習のイメージ



- ・学習と実践をサイクルで捉えては
- ・サイクルならどこから入ってもスタートしてもよい
- ・学習・実践サイクルで変容する環境問題に対応していく
- ・それが“つながり”の創出と課題解決、その先の持続可能な社会へとつながる

「用語の整理」

持続可能な社会づくりのための環境学習（ESD）

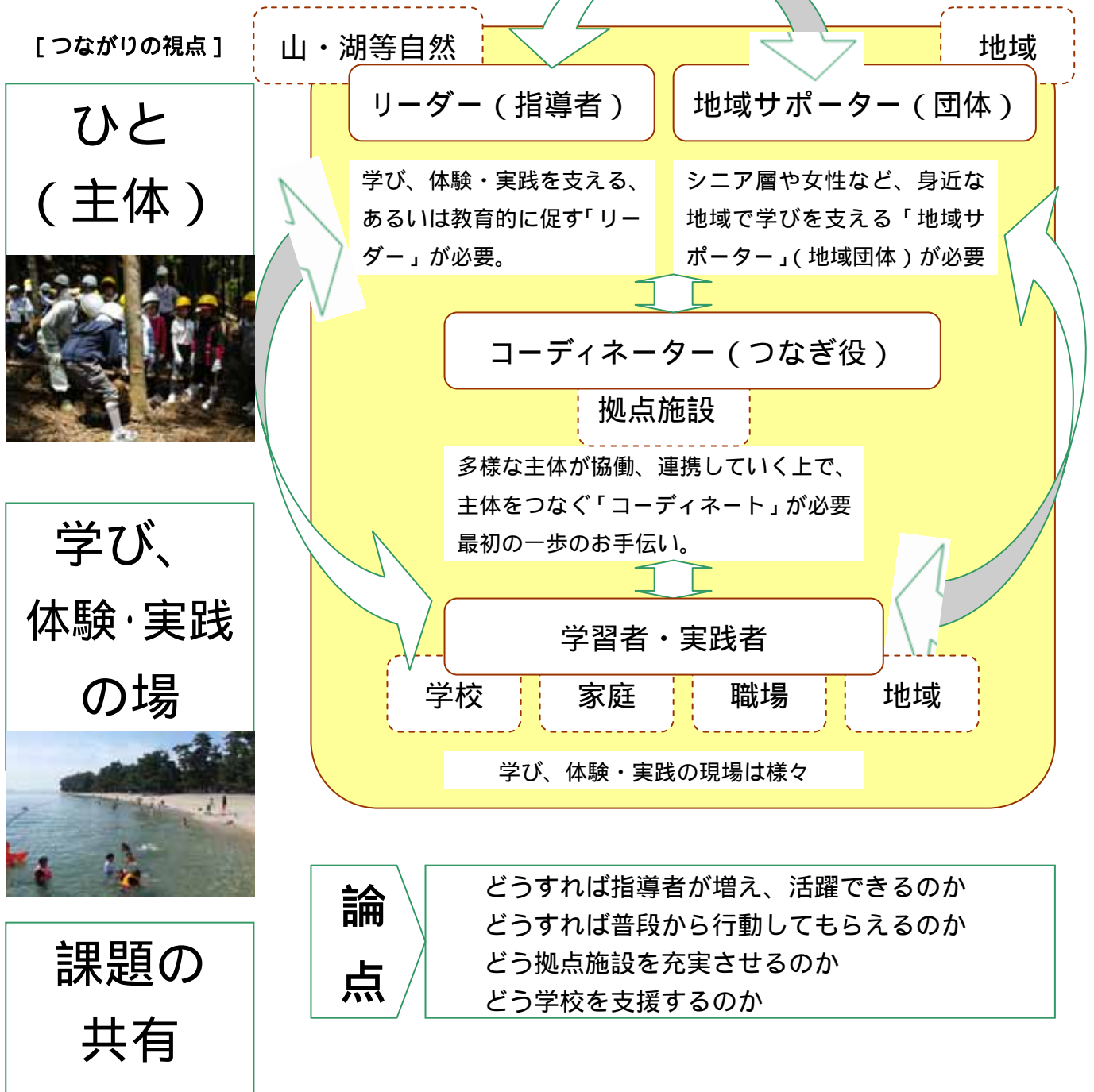
ESD の枠組みの中で環境学習を捉え直した考え方で、学びに「実践」と「つながり」の視点を意識するもの。学びにおいては、住民一人ひとりがこれからの琵琶湖や持続可能な滋賀社会のために、どうしていくかを自ら学ぶ、あるいは相互に学びあう、教えあうというニュアンスをこの言葉に込めている。 小委員会での共通理解として

環境学習で何が大切か

[つながり]	[基本的な考え方]	[体験・実践の視点]
場の つながり	<ul style="list-style-type: none"> あらゆる場で行われること 体系的に行われること 	<p>家庭、学校、地域、職場等のあらゆる場で学習、体験、実践すること</p> <p>暮らしの様々な場面で実践すること ライフスタイルの変革</p> <p>幼児から高齢に至るまで、ライフステージに応じた学習、体験、実践をつなげていくこと</p>
人と人の つながり	<ul style="list-style-type: none"> 人と関わりを持ち行われること 次世代を意識して行われること 	<p>学びや実践において、人と人（個人として）のつながりや信頼関係を大切にすること</p> <p>孫子の世代に豊かな琵琶湖、今の世代と次の世代のつながりを意識して行動すること</p>
課題の つながり	<ul style="list-style-type: none"> 総合的に行われること 地域に根ざして行われること 	<p>環境と社会・経済・文化とのつながりなど、様々な課題の間のつながりを意識し、総合的にどうやって課題を解決していくかを考え、行動すること</p> <p>地域に愛着をもち、地域の課題を解決する（地域をよくする）ことが、全県を、琵琶湖をよくすることにもつながることを意識して行動すること。</p>
主体間の つながり	<ul style="list-style-type: none"> 協働・連携が重視されて行われること 	<p>学習や実践では、NPO、学校、企業、メディア等の多様な主体がつながりあい、協力しあうこと</p> <p>環境人材を生かす場や機会を広げること</p>

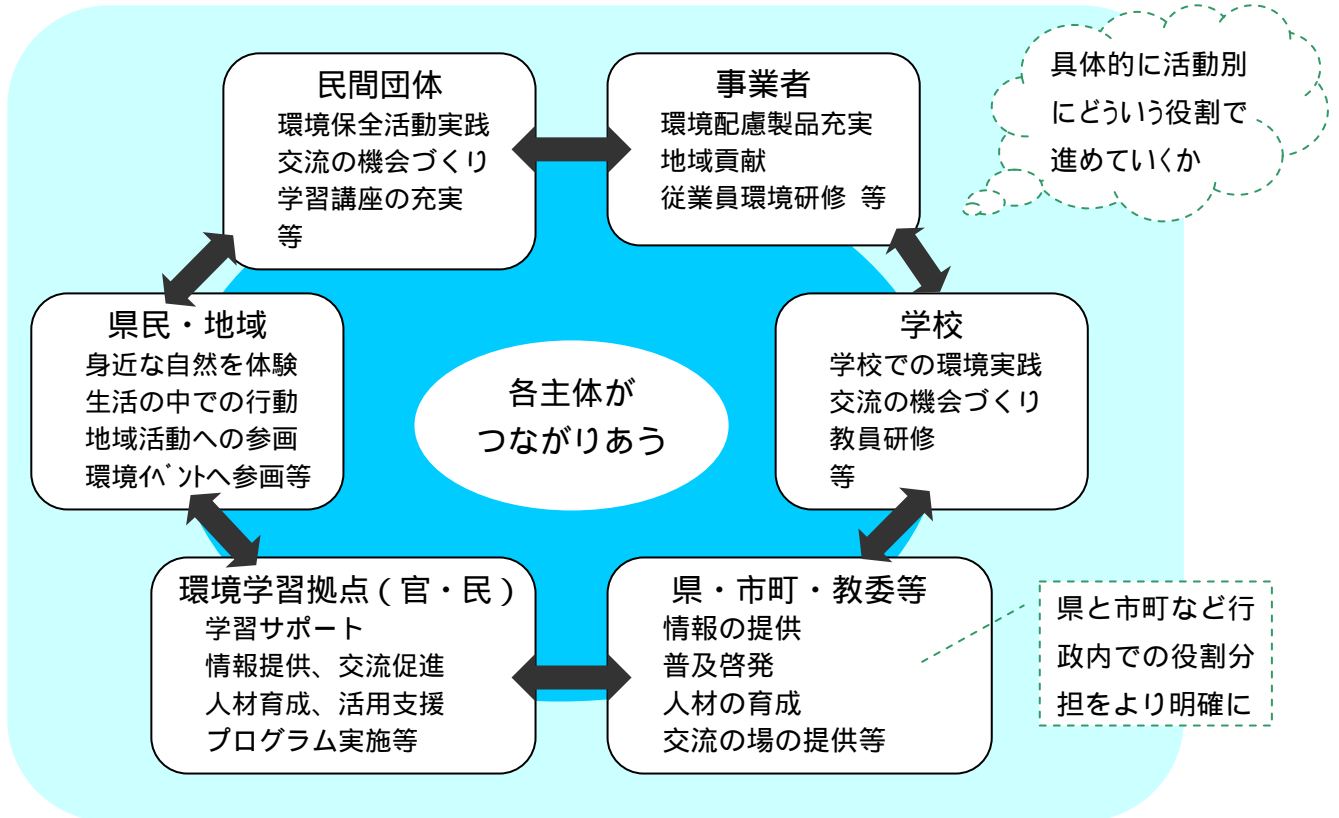
環境学習を推進するために

学びあい・教えあいの関係の中で



各主体の役割

環境学習を進める上で、今後さらに求められる役割等



環境学習の推進による成果

- ・ 持続可能な社会づくりのための環境学習の目標は、人材育成による持続可能な社会づくりであることから、その目標の達成度は、学習機会や指導者・サポーターの増加だけでなく、そういった取り組みにより、どれだけ人々が持続可能な社会づくりに向けて実践するようになったかで測るべきではないか。